

# 外来がん患者のサポートチームを活用した1事例

耳鼻科外来 勝亦 順子 羽野 歩 橋本 泳子  
緩和ケア推進委員会 小澤 宏之 白石 好 室津 恵三 梅木 幹子  
外来緩和ケアカンファレンス 浅場 香 千装真由美 祖父江 彰

## I. はじめに

がん患者は治療の場が病棟から外来へとシフトしてきており、外来という環境の中で、患者の療養生活を支えていくことが重要であることを実感している。外来ではその取り組みの1つとして、2007年12月より、通院点滴療法室を中心に外来緩和ケアカンファレンスを開始し、2008年8月より当院に通院している患者対象の緩和外来がスタートした。しかし、まだこのシステムを活用していない科が多いのが現状である。

今回、耳鼻科外来と外来緩和ケアカンファレンスを通じてチームで関わり合い、在宅療養を支えることで患者のQOLの維持・向上に貢献できたと考えられる事例を報告し、外来でのサポートチームの関わりとシステムを示す。

## II. 患者プロフィールと治療の経過

30歳女性。舌癌診断され、化学療法、手術、放射線治療行方が再発。緩和ケアとなり、できる限り在宅療養の方針。方針決定後、外来緩和ケアカンファレンス介入。介入時の患者の状況から、疼痛コントロール、栄養管理、在宅療養支援をカンファレンスの目的とし、介入スタート。

## III. 緩和ケアカンファレンスでの多職種への介入

耳鼻科外来→(主治医)治療方針決定  
(看護師)看護計画に沿った援助  
関連職種への介入の依頼

薬剤師 →疼痛のアセスメント

内服方法の提案

栄養士 →食事のアドバイス

心理士 →QOL評価表の分析、カウンセリング

他科外来看護師→カンファレンスへの参加、アドバイス

緩和外来→疼痛コントロール

## IV. 結果

カンファレンス介入1ヶ月後には疼痛コントロールされ、食事摂取量増加による体重増加、自宅でのQOLの向上があり、約5ヶ月間の在宅療養が行えた。

## V. 考察

今回のケースでサポートチームを活用しなければ、患者の希望である在宅療養時間はもっと短かかったと考えられる。

外来がん患者の在宅療養を支えるためには、多職種による支援が重要であり、そのためには外来緩和ケアカンファレンスを活用し、カンファレンスには主治医が参加し、リーダーとなることでメディカルがそれぞれの力を発揮できることを強く感じた。

## 当院におけるフットケアチームの取り組み

### ～ 内科、血管外科、形成外科、糖尿病看護認定看護師、皮膚・排泄ケア認定看護師のコラボレーション ～

皮膚・排泄ケア認定看護師 岡 志津香  
形成外科 今川孝太郎

## I. 背景

糖尿病性壊疽患者は血行再建術で救助できないことが多く、下肢決断しか術がないのが現実であり、

当院では以前からフットケアの必要性が高かった。従来各科が得意の分野で診察、治療に当たっており、患者もどこの診療科を受診したらよいか分からない現状であった。それゆえにフットケアのシステム化とチーム医療の必要性を強く感じ、当院では平成20年5月12日よりフットケア外来を開設した。

## II. 経過・成績

フットケア外来開設に向けて平成20年1月よりフットケアチームを結成しシステム作りに取り組んだ。対象患者を明確にし、リスクアセスメント表の作成や外来日時の設定を行い、各専門分野がどのように連携していくかの検討を重ねた。その結果、各科外来でフォロー中の患者の中で血流障害、知覚・

神経障害があり足病変のリスクが高い患者や既に足病変がある患者を糖尿病認定看護師が足チェックシートを用いて拾い上げ、フットケア外来へ依頼し、血管外科医・形成外科医・皮膚・排泄ケア認定看護師が血流の評価や創傷の予防や治療にあたるといった当院でのフットケアの診療の流れが完成した。

## III. 考察・今後の課題

各専門領域が連携し、システム作りをしたことでフットケアが必要な患者が診察や治療が受けられることにつながった。今後は、ハイリスク患者やセルフケアが困難な患者などがチームカンファレンスを行い、チームでより統一した治療を行っていけることが課題である。

# 助産師外来設立 3 年目を迎えて

6-1 病棟 西岡 恵美

## I. はじめに

6-1 病棟及び産婦人科外来では助産師外来を設立して今年で3年目を迎える。導入の当初は、試行錯誤の連続であったが現在軌道に乗ってきており妊婦さんから高い評価を得ている。今回立ち上げまでの取り組みと、またどのような評価を受けているかを紹介する。

## II. 助産師外来の設立に至るまで

当科では、「安全で感動のお産とすばらしい育児のスタートを応援します」をスローガンとし、年間600件の分娩を4人の医師と23人の助産師で取り扱っている。個々の妊婦さんが安全で且つ感動のお産となる為には、妊娠期をどのように過ごすかが重要であり医師、助産師の関わりも大切である。反面、医師の数が減少したことにより多忙を極め、妊婦さんの全ての声に傾けるには時間が不足していた。そこで、医師と助産師が連携をとり、正常妊娠は助産師、異常妊娠は医師が対応することで、より安心した妊娠生活が送られるのではないかと考え立ち上がったのが助産師外来である。

## III. 助産師外来の実際

助産師外来では、平日1人30分の完全予約制で1日最大9人の妊婦さんを診察している。料金は医師と同額の4200円を頂いている。内容は、妊婦健診、超音波検査、保健指導を行い、異常と考えられる場合は医師へその場で報告をして対応している。実際診察を受けた妊婦さんからは、「助産師外来で話をしている内に不安がなくなっていた」「大丈夫の一言で安心できた」の声が聞かれている。また、病棟の助産師が対応しているため、入院中も顔を合わすことができ、看護により取り組みやすくなっている。一方で、「部屋が狭い」「エコーがみにくい」などの指摘もあり、今後検討が必要と考える。

## IV. 終わりに

今後も医師と連携し患者を含む3者の信頼関係の中でよい看護を提供できるよう関わっていきたいと考えている。